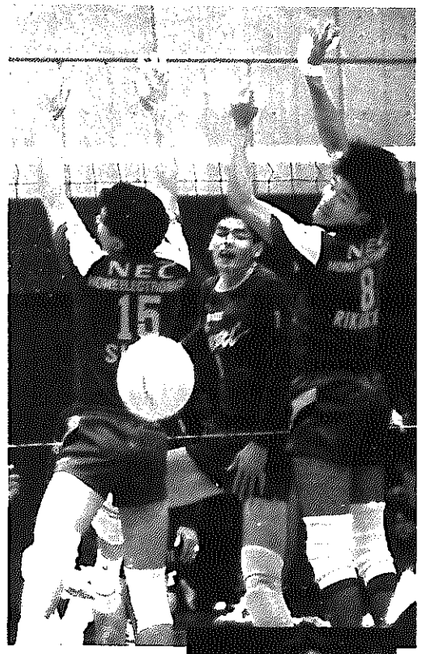
パワフル、絶妙ー。トップ選手のプレーに拍手

実業団バレーボールリーグ戦

㈶日本バレーボール協会と日本実業団バレーボール連盟の主催による第二十六回実業団バレーボールリーグ男子大会が、二月五日カルチャーセンターで行われました。

Vリーグへの昇格をかけて激戦が展開される実業団リーグ。この日は豊田合成チームとNECホームエレクトロニクスチームの試合が行われました。



公式戦とあって選手たちは気迫のこもった素晴らしいプレーを随所で見せます。強烈なサーブやスパイク、絶妙のフェイントなど、日本トップクラスの選手が見せる妙技に、詰め掛けた一千百人の観衆からは、感嘆のため息や歓声、大きな拍手が沸き起こっていました。

試合の結果は、一セットずつを取り合った後、第三セットを豊田合成チームが接戦の末に奪取。流れに乗って第四セットも取り、見事に勝利をものにしました。

試合前日に行われたバレーボール教室。市内中学生が指導を受けた。

ほしいものがいっぱい

おたまじゃくしの家　中古衣料バーゲン

二月五日、通所作業所「おたまじゃくしの家」（松浦宏平所長）で、中古衣料バーゲンが行われました。これは毎年行われているもので、今回で六回目。

バーゲンが始まる前から行列ができるほどのにぎわいでした。バーゲンの品物は、子供服から着物までと豊富な品ぞろえ。初めてきたというある女性は「たくさんあるので、どれにしようか迷ってしまいます。値段も安くて嬉しいですね」と話していました。

バーゲンの収益は、施設の運営費に充てられるほか、阪神大震災の義援金として送られます。

伝統工芸「仏壇」を取材

新潟明訓高校

県内各地の高校生が地域の文化や産業などを取材し、冊子にして新潟県を紹介する県主催の「高校生ふるさと再発見推進事業」。その取材班の一つが二月十日、白根市内の仏壇店を訪れました。

取材に訪れたのは、新潟明訓高校（本間忍校長）の文芸部と写真部の一・二年生六人。同校の生徒たちは、白根のほか月潟村など七市町村を担当。白根市での題材は伝統工芸の仏壇。金ぱくの張り方や仏壇製作の工程などの話を聞いたり、作業の様子を写真に撮ったりと、熱心に取材していました。

県内各地の高校生がまとめた冊子は「にいがた夢色通信（仮称）」として、七月に完成する予定。「全国の人が新潟って良い所だなあと思える冊子にしたいです」と取材班は話していました。

大凧合戦優勝カップを寄贈

ヘラ・ホリヤーさん
バーバラ・ラルジーさん
（レルヒ少佐の遺族）

凧合戦の優勝カップが白根凧合戦協会（本間祐一会長）に寄贈されました。カップを寄贈したのは、日本にスキーを伝えたことで知られるレルヒ少佐の遺族です。

レルヒ少佐は、明治四十四年に大凧合戦を観戦。その勇壮さに感激して優勝旗を寄贈しましたが、昭和六年の白根大火で消失。凧合戦協会では平成四年に優勝旗を復元したものの、少佐に関するものは何も残っていませんでした。このことを「レルヒの会」（上越市）を通じて知った遺族は、遺品が何も残されていないことを残念に思い、カップの寄贈を申し出たものです。

寄贈された優勝カップ

カップはオーストリアを訪れたレルヒの会に託され日本へ。そして一月十六日に、同会のメンバー羽尾勇さん（上越市）によって白根凧合戦協会に手渡されました。今回仲介役を果たしてくれた「レルヒの会」と白根凧合戦協会との交流が始まったのは平成四年のこと。上越市内の小学校で凧作りの指導をしたのがきっかけです。

寄贈を受けた同協会では「今年はオーストリアのジャパンウイークに参加する。墓参りをしてお礼を言いたい」と話していました。

楽しい演技に大笑い

新飯田商工会青年部

二月二日、新飯田商工会青年部（安藤光部長）とOBらが、茨曽根・新飯田保育園を訪問。新飯田に伝わる民話「青地蔵さま」をもとにした劇を披露しました。

同会青年部は、毎年節分の日に、劇と豆まきを行っており、今回で四回目。脚本から小道具まですべてが部員の手作り。部員たちは一週間前から夜遅くまで練習をしてきました。劇は「中ノ口川に沈んでいるお地蔵さまを、鬼の力を借りて助け上げる」というもの。ユーモラスな部員の演技に子供たちも大喜び。

演技の後、鬼にふんした部員たちが園児にお菓子をプレゼント。園児たちは、嬉しそうに受け取っていました。

阪神大震災のために役立てて

市内小・中学生募金運動

「阪神大震災で被害を受けた人たちのために役立ててほしい」と、市内の小・中学生が募金活動を実施。それぞれ集めたお金を手に、市役所を訪れました。

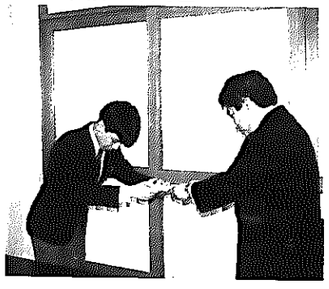
一日には、市内五つの中学校の代表が市長を訪問。「わずかな気持ちですが、役立ててほしい」と各学校の代表が集めたお金を市長に手渡しました。これに対し竹内市長は「みなさんと同じ年代の子供たちも、被害に遭って困っています。みなさんの温かい気持ちが一日も早い復興につながるよう責任持ってお預かりします」と感謝の意を述べました。各学校では、募金箱を廊下や各教室に設置。生徒玄関などで募金活動を行った中学校もありました。

三日には、大通小学校が、六日には白根小学校が、集めたお金を手に、市役所を訪れました。

大通小学校では、同小学校の企画委員会が「自分たちにできることはないか」と募金を開始。校内放送やポスターで運動を盛り上げ、クラスごとに募金箱を置きました。生徒たちは「目標額を上回る金額が集まって良かった」と満足そうな表情で話していました。

白根小学校では、二十六日からの三日間、募金運動を実施。運営委員会の五・六年生が、毎朝玄関前で募金を呼び掛けました。「非常に短い期間だったが、予想以上に集めることができた。災害に対する生徒の関心の高さがうかがえた」と担当の名塚悟先生は話していました。

これらの募金は、日本赤十字社を通じて、阪神大震災の復興のために役立てられます。



寄付を手渡す市内中学生